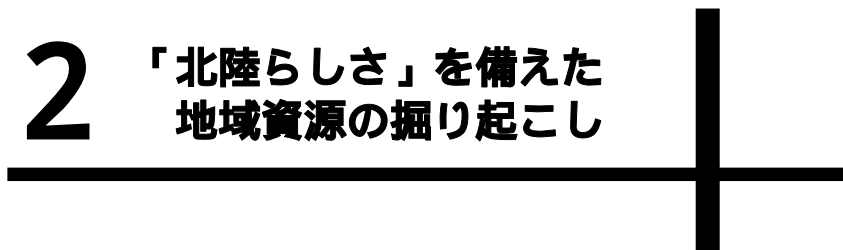


2 「北陸らしさ」を備えた 地域資源の掘り起こし



本章の目的・構成

北陸圏は、自然、歴史、食、文化など観光交流の活発化に資する地域資源が豊富であるといわれている。そこで、本章では「北陸らしさ」の再整理を試みるとともに、「北陸らしさ」を備えた地域資源の活用実態を調査することにより、地域資源の掘り起こしを行う。

2-1 「北陸らしさ」の再整理

特に北陸地域が歴史的に形成される段階においてどのように特性が生まれたかを把握するとともに、自然環境、各種指標等の分析を加えることにより「北陸らしさ」の再整理を試みる。

2-2 「北陸らしさ」を備えた地域資源の活用実態の現況

「北陸らしさ」を備えた地域資源の活用実態について調査を行い、それらを整理することにより今後の地域資源の活用方策を探る基本情報とする。

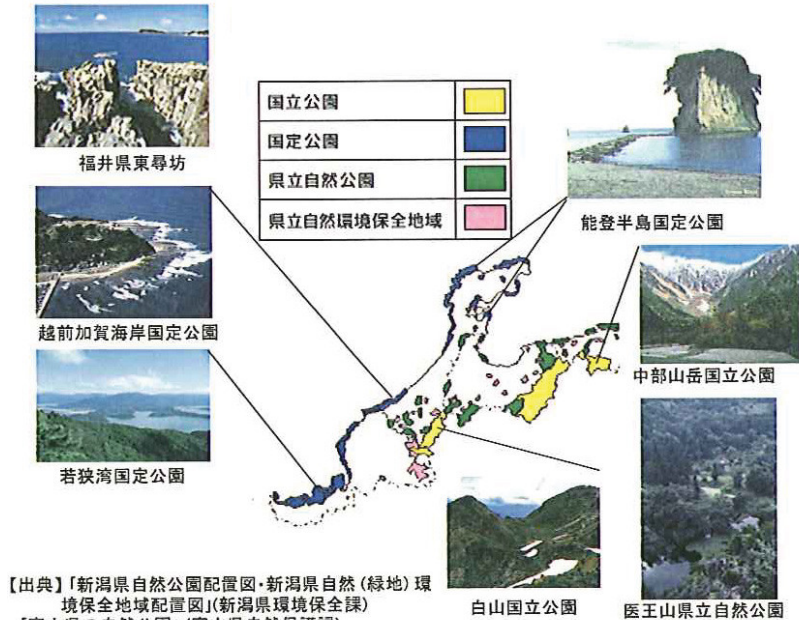
2-1 「北陸らしさ」の再整理

(1) 自然環境からみた北陸

地形

- ・北陸三県は、北アルプス立山連峰、白山などの急峻な山岳地帯を有するとともに、平野を挟んで日本海が迫る変化に富んだ地形を有しており、山、海の国立・国定公園に指定されている。(図 2-1)
- ・岩石海岸や美しい砂浜、砂丘、リアス式海岸など変化に富む海岸は、深海まで続く湾を形成するとともに、寒流と暖流との潮境に位置することから豊かな漁場を形成し、越前ガニ、ホタルイカ、ブリなど多彩で豊富な水産資源を生んでいる。(図 2-2)
- ・豊かな河川により扇状地が発達し、富山平野、加賀平野、福井平野が形成され、豊かな米産地となっている。(図 2-3)

図 2-1 北陸圏の国立・国定自然公園



【出典】「新潟県自然公園配置図・新潟県自然(緑地)環境保全地域配置図」(新潟県環境保全課)
 「富山県の自然公園」(富山県自然保護課)
 「石川県環境白書」(石川県環境安全部)
 「福井県の自然公園」(福井県環境部自然保護課)

図 2-3 農業生産額に占める米の割合

富山県	73.4%	全国 1 位
石川県	56.1%	
福井県	68.3%	全国 2 位
全 国	21.9%	

出所：生産農業所得統計
(H18, 農林水産省)

図 2-2 北陸圏の豊富な水産資源



越前ガニ



ブリ漁の様子
出所：氷見市HP

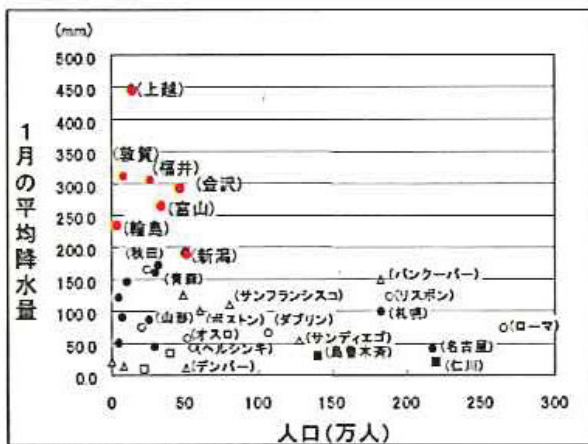


ホタルイカ漁の様子

気候

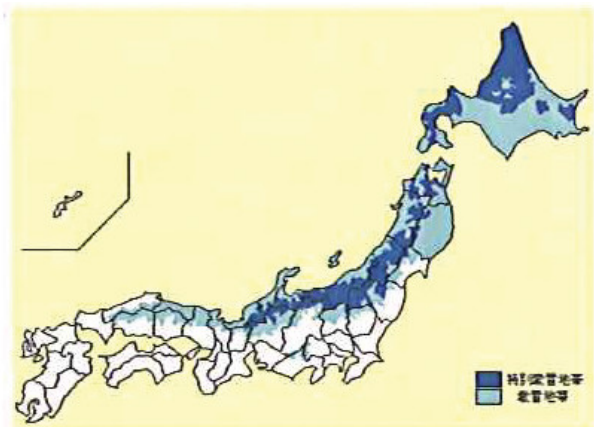
- ・年間降水量が 3,000 ミリを超える地域も多く、北陸の主要都市における 1 月の平均降水量は、北半球の主要都市の中でも特に多い。(図 2-4)
- ・北陸の内陸部は特別豪雪地帯に指定されており、その他の地域も豪雪地帯に指定されるなど降雪量が多い。(図 2-5)
- ・降水量が多く、地形が急峻なことから、急流河川が多い点も特徴である。(図 2-6)
- ・人口あたりの水資源賦存量が高く、渇水被害が少ないなど、水資源が豊富である。圏内には名水百選が 10 箇所ある。
- ・豊かな水資源は生物の多様性を育み、富山県が植生自然度本州一(北海道・沖縄に続き 3 位)であるように、豊かな自然環境を形成している。(図 2-7)

図 2-4 主要都市における 1 月の平均降水量



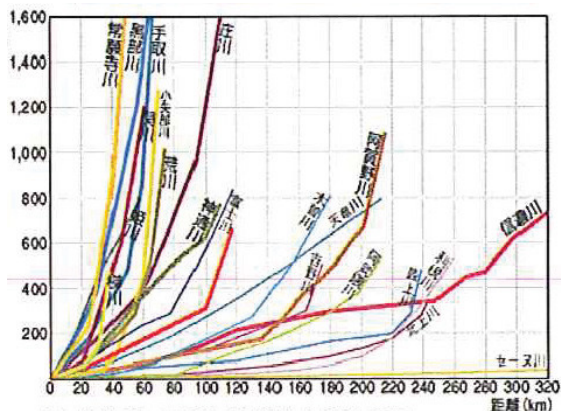
出所:「北陸圏の現状」北陸地方整備局

図 2-5 特別豪雪地帯及び豪雪地帯指定地域



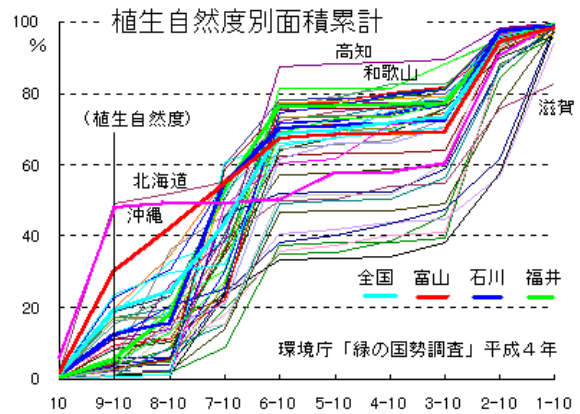
出所: 全国積雪寒冷地帯振興協議会HP

図 2-6 北陸地域の主要河川の勾配



出所:「北陸圏の現状」北陸地方整備局

図 2-7 植生自然度



出所:「富山を考えるヒントHP」富山国際大学浜松誠二教授

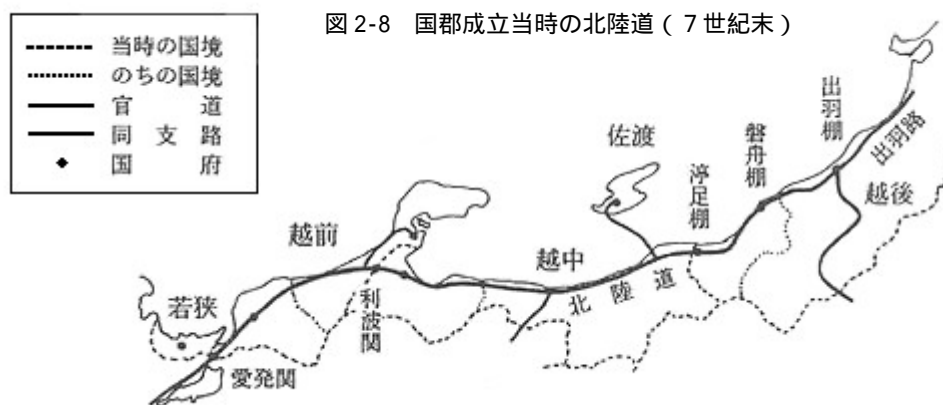
「北陸らしさ」を整理する視点

- ・山岳と深海が近接する変化に富んだ豊かな自然が、景勝地を形成している。
- ・豊かな湾の存在と海流がぶつかる位置にあることから、豊かな漁場を形成しており、食文化の基礎となっている。
- ・水資源と植生の豊かさが、水田や豊かな里山を形成する礎となっている。

(2) 歴史的背景からみた北陸

「北陸」の成立(古代~平安時代)

- ・北陸地方は、古くは「越国」「高志国」と呼ばれており、3~4世紀頃「越の国」が存在したといわれる。その北端は、石川県・富山県境付近。7世紀までには現在の山形県まで広がる。
- ・7世紀末、律令時代に国郡制が施行されると、「高志国」は越前・越中・越後にわかれた。このとき、越前には加賀・能登も含まれている。
- ・このとき現在の「北陸」という地域および名称の原型となる「北陸道(ほくろくどう)」が成立した。北陸道には、総数で駅40箇所、駅馬199箇所、伝馬66箇所、船2箇所が置かれた。
- ・8世紀初頭、羽咋・能登・鳳至・珠洲の4郡が越前国から分離し、能登国が誕生(その後、一旦越中国に併合され、さらに越中国から独立する経緯をたどる)。また、能登の分離から105年後(9世紀初頭)には、加賀国が越前から分離した。



出所：『北陸の風土と歴史』(浅香年木, 山川出版社)

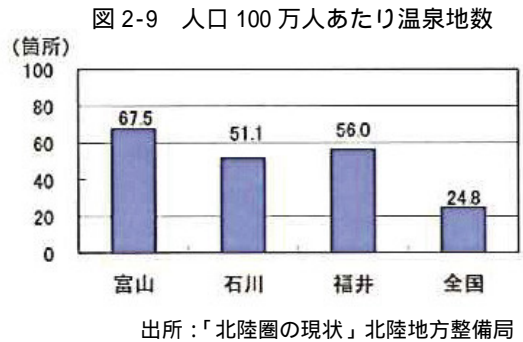
大伴家持と越中万葉

- ・大伴家持は、天平18年(746)に28歳で国守として越中の国府(現高岡市伏木)に着任し、5年間を越中で過ごした。家持は歌人としても、『万葉集』の編者としてもよく知られており、約4,500首に及ぶ『万葉集』の中に、家持の歌は473首あり、そのうち越中在住中に詠まれたものは223首にのぼる。
- ・かつて家持が住んだ高岡市伏木の地には「高岡市万葉歴史館」があり、『万葉集』と万葉の時代についての調査・研究が行われており、全国から研究者、愛好者が訪れている。

立山信仰・白山信仰と温泉の開湯

- ・立山と白山は、富士山と並ぶ日本三霊山のひとつとされ、山岳信仰の聖地であった。
- ・立山の開山縁起や伝承では、平安初期に越中の国司であった佐伯有若の子、有頼(慈興上人)が立山を開いたとされている。
- ・白山が開かれたのは717年(養老元)、越前の泰澄大師によるものと言われている。平安前期には、加賀・越前・美濃に馬場がおかれ、そこから3つの禅定道と呼ばれる登拝のための道が開かれていた。
- ・加賀馬場の中枢は『延喜式』所載の白山ひめ神社、越前馬場は平泉寺、美濃馬場は長滝寺が中心であり、平安後期以降3つの馬場は相次いで比叡山延暦寺の末寺となり、勢力を拡大した。

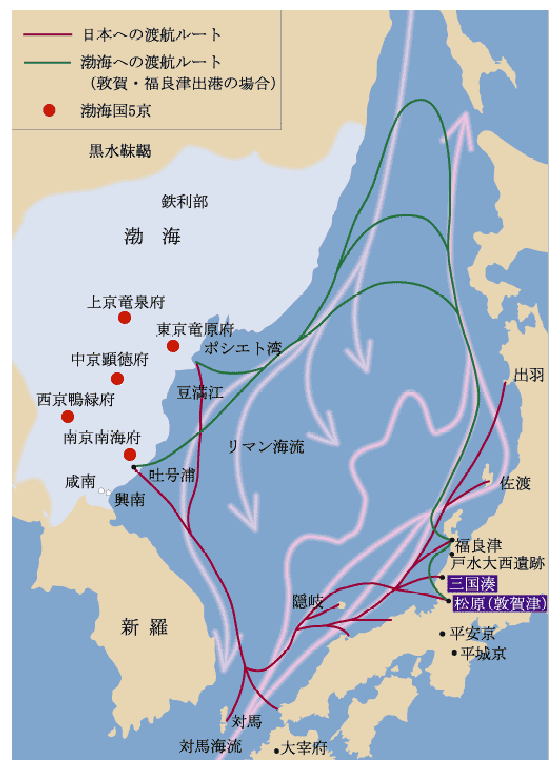
- ・白山信仰は加賀温泉の開湯とも深く関わっており、日本最古の温泉、粟津温泉は718年(養老2年)泰澄大師によって開湯、山代温泉、山中温泉は白山に修行に向う僧・行基によって発見されたと言われている。また、同時代には現在の和倉温泉にて温泉湧出の記録も残っている。(片山津温泉は江戸時代、芦原温泉は明治時代の開湯と新しい)
- ・人口あたりの温泉地数は全国平均の2倍以上であり、大きな地域資源となっている。(図2-9)



大陸からの玄関口

- ・8~9世紀に盛んであった渤海との交流は、北陸が玄関口として機能していた。渤海使の来航は季節風と海流を利用したため、渤海使は日本海沿岸の各地に来着し、能登、加賀、若狭、越前がその交流と深く関わっていた。(図2-10)
- ・渤海使は、仏典などの大陸の文化・文物をもたらし、日本と唐の中継貿易を行うなど、文化・経済面で大きな役割を果たし、北陸は大陸文化の玄関口として当時の最先端の文化的先端地であったと考えられる。
- ・渤海使の一行は着岸地にて安置され、大使ら少数のみが北陸道、若狭街道を通して入京したと伝えられている。

図2-10 渤海使日本海推定ルート



若狭街道

- ・奈良時代に、若狭小浜で獲れた鯖が若狭街道に沿って朽木谷を抜け、大原の三千院あたりから京に入る道に運ばれた記録が残っている。その道が、小浜から出発する鯖街道であった。
- ・平安時代に編集された「延喜式」に、天皇の御食料である「御贄(みにえ)」を納める国として、若狭が記されており、御食国(みけつくに)として現在も語り継がれている。

「北陸らしさ」を整理する視点

- ・古来より越国として北陸道を背骨にし、一体的な地域として認識されていた。
- ・大伴家持が越中国府に着任し、多くの和歌を詠み「万葉集」編纂へとつながった。
- ・立山信仰、白山信仰が興隆し、山岳信仰文化、宗教拠点としての寺社が整備された。
- ・加賀温泉、和倉温泉が開湯し、1300年近い温泉地としての歴史をスタートさせた。
- ・大陸からの玄関口として、能登から若狭が文化交流拠点として機能した。
- ・天皇の御食料を納める国として若狭が位置づけられ、海産物の豊かさが古くから認知されていた。

浄土真宗の広まりと戦乱（鎌倉時代～安土桃山時代）

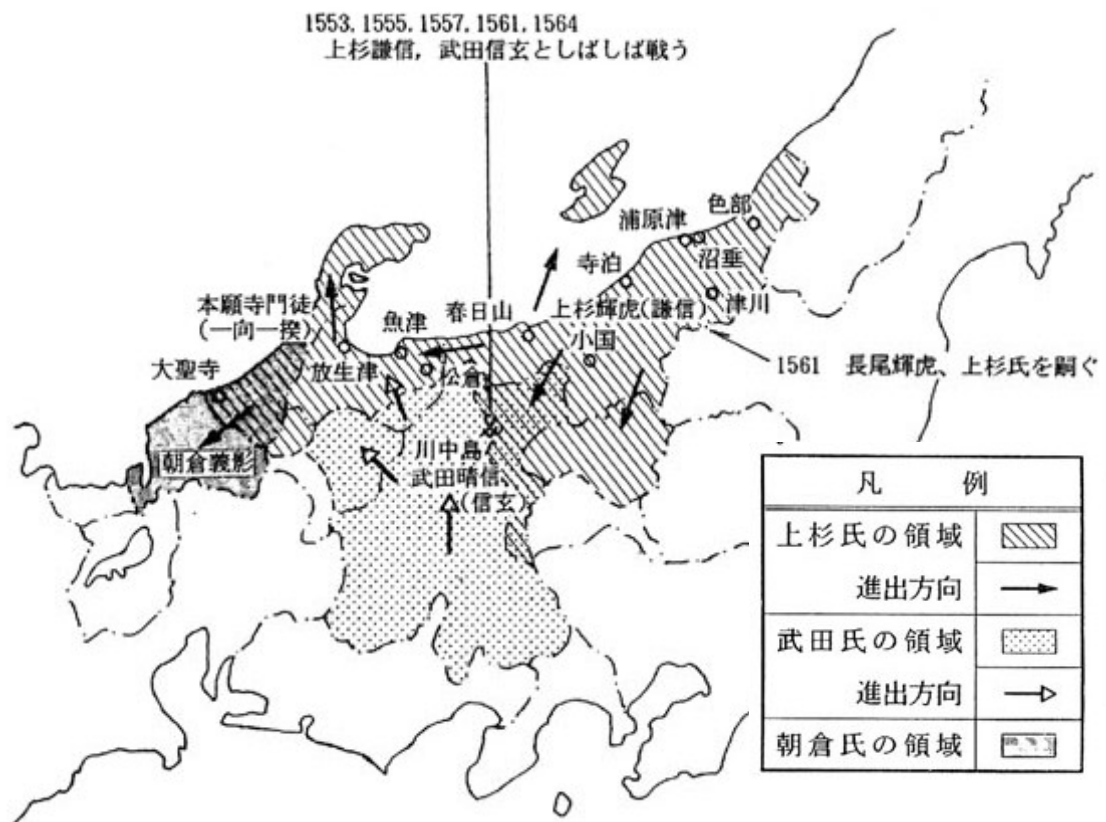
- ・ 14 世紀末に越中井波に瑞泉寺が開かれてから浄土真宗門徒が増大していたが、15 世紀末本願寺八世法主の蓮如が北陸へ逃れたのを機に、北陸では浄土真宗が盛んとなる。蓮如は加賀と越前の境にある吉崎に根拠を置き、精力的な布教を重ねて門徒を組織化し、越前を中心に加賀・越中における門徒勢力は強大化した。
- ・ 1488 年加賀の守護であった富樫政親が一向宗門徒と争って自刃すると、加賀一国は一向宗の支配下におかれた。
- ・ このような背景により、現在でも、富山・石川・福井（嶺南）は浄土系が約 7 割を占めている。（表 2-1）
- ・ 越後の上杉謙信は、関東や信濃、越中に南下を繰り返していた。一向一揆は謙信と対立する武田信玄と結び、富山城を拠点に謙信の進出を阻んでいた。信玄の死後、上杉謙信は一向一揆を破り、加賀・能登にまで進出した。
- ・ 上杉氏が強大になると、織田信長は加賀に進出。一向宗を破り（佐久間盛政の尾山御坊攻め）織田信長の武将佐々成政が越中を征服。上杉勢力を駆逐した。

表 2-1 宗教の分布状況

	浄土系	禅宗系	日蓮系
富山	75%	15%	4%
石川	74%	10%	7%
福井	67%	9%	10%
敦賀	31%	50%	7%

出所：「北陸地域の自立に向けて」
（社）北陸建設弘済会，2008

図 2-11 戦国大名の領域と進出方向



出所：『日本史地図』（児玉幸多編，吉川弘文館）

宗教とまちの形成

- ・浄土真宗とゆかりの強い都市として井波、金沢、吉崎がある。
- ・井波は現在でも木彫の町として伝統工芸の集積が高く、金沢は加賀一向一揆の本拠となった本願寺金沢御堂(金沢御坊)を改修し金沢城がつくられ、江戸時代には加賀百万石文化として開花する。(図2-12)
- ・吉崎御坊(あわら市)には現在、蓮如上人記念館がある。
- ・同時代に飛騨の聞名寺が八尾に坊を移したことにより、八尾が門前町として開け、宗教・文化の中心として発展することになる。おわら風の盆は、八尾の独立と大きく関係しているといわれている。(図2-13)
- ・越前では、大野郡平泉寺が栄え、白山登拝の起点=越前馬場として強大な勢力を誇った。平泉寺は源平争乱に参加し、鎌倉幕府滅亡の際には北条氏を攻め、南北朝動乱期には北朝方に属し、戦国期には朝倉氏と力を合わせ一向宗に対応するなど、軍事力、政治力ともに大きなものを持ち続けた。(図2-14)

図 2-12 井波の街並み



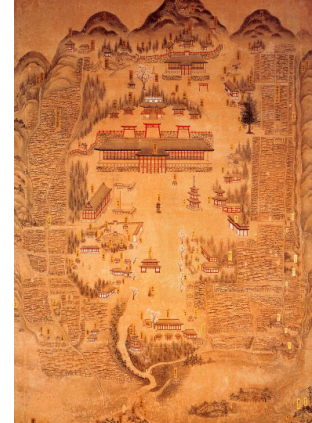
瑞泉寺に向う参道には、彫刻師の工房が並び、往時の繁栄を偲ばせる。

図 2-13 八尾の街並み



八尾は坂の町としても有名で、おわら風の盆は、まちなかで踊られる人気の高い祭りである。

図 2-14 平泉寺境内図



平泉寺六千坊と言われ、強大な勢力を誇った。
出所：「図説福井県史」福井県文書館

文人大名畠山義総

- ・1526年ごろまでに七尾城に入り、七尾湾と富山湾の流通掌握や、宝達金山の開発を行った畠山義総は、若くから和学の第一人者として知られており、義総の威勢を頼って多くの公卿、歌人、連歌師、禅僧などが都から下向してきた。義総は30年にわたって政治的安定と文芸の高揚をもたらしている。
- ・桃山時代に活躍した画人・長谷川等伯は、1539年(天文8年)畠山氏の家臣である奥村文之丞宗道の子として七尾に生まれ、文化的な環境の中で才能を育んだといえる。

「北陸らしさ」を整理する視点

- ・中世には浄土真宗が盛んとなり、加賀国が一向宗の支配下におかれるなど、宗教勢力が強まった。
- ・浄土系仏教が根強く息づいているとともに、宗教とともに井波、八尾、大野などの町が発展し、文化の継承地として息づいている。
- ・七尾では畠山文化が開花し、長谷川等伯を輩出している。

加賀百万石・北前船（江戸時代）

- ・織田信長の武将であった前田利家が能登国を領有。その後、加賀国・越中国も領有し、江戸時代を通して前田家が加賀、能登、越中3国に及ぶ領土を支配した。三代藩主利常の次子利次が富山に10万石で分封、三男利治が大聖寺に7万石を分封し、それぞれ富山藩、大聖寺藩が成立した。
- ・福井では越前一国が家康の次男である結城秀康に、若狭一国が大津城で関ヶ原の戦いの直前まで奮戦した京極高次に与えられ、福井藩と小浜藩が成立する。その後、丸岡藩の成立や、幕府領の成立など経て多くの領地が生まれた。

百万石文化の開花

- ・前田藩は、学芸を奨励し、工芸を発展させ、芸能の保護など、加賀百万石文化とよばれる文教政策に力をつくした。(図 2-15)
- ・美術・工芸職人を招致し、細工所と呼ばれる藩営の工芸製作所において漆器工芸(金沢漆器) 陶芸(九谷焼) 金属工芸(彫金・象嵌・金沢箔)などが作られ、工芸都市金沢の基となった。(図 2-16)
- ・また、武家社会の懐石料理として発展した加賀料理は、専門の料理人を生み、寛政元年(1789)八軒の料理屋が公認されたことから、金沢での料理屋が始まったといわれている。(図 2-17)
- ・同時代には、輪島塗、山中漆器が興隆するとともに、小浜藩では中国漆器にヒントを得て若狭塗が始まっている。(図 2-18)
- ・富山平野では、水害との戦いに苦しみながらも用水を開き、土地の新田開発を進め、農業・売薬業をはじめ諸産業を興している。
- ・百万石文化、工芸都市金沢は現在も継承され、地域工芸体験の旅行先では「石川県」が一位に選ばれている。(図 2-19)

図 2-15 金沢城石川門



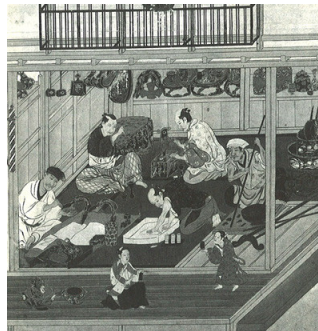
出所：新石川情報書府HP

図 2-17 加賀料理と伝統工芸



出所：新石川情報書府HP

図 2-16 蒔絵師の店先

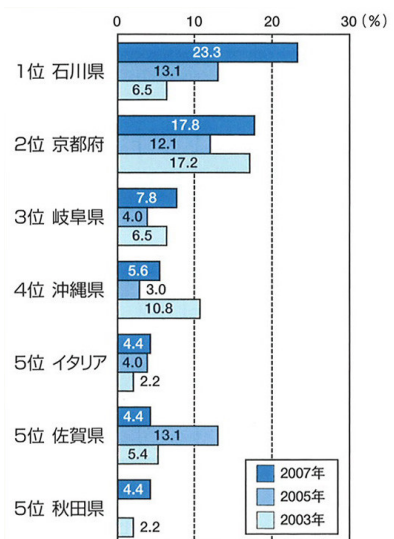


出所：図説石川県の歴史

図 2-18 若狭塗(海底を圖案化)



図 2-19 地域工芸体験として行ってみたい旅行先



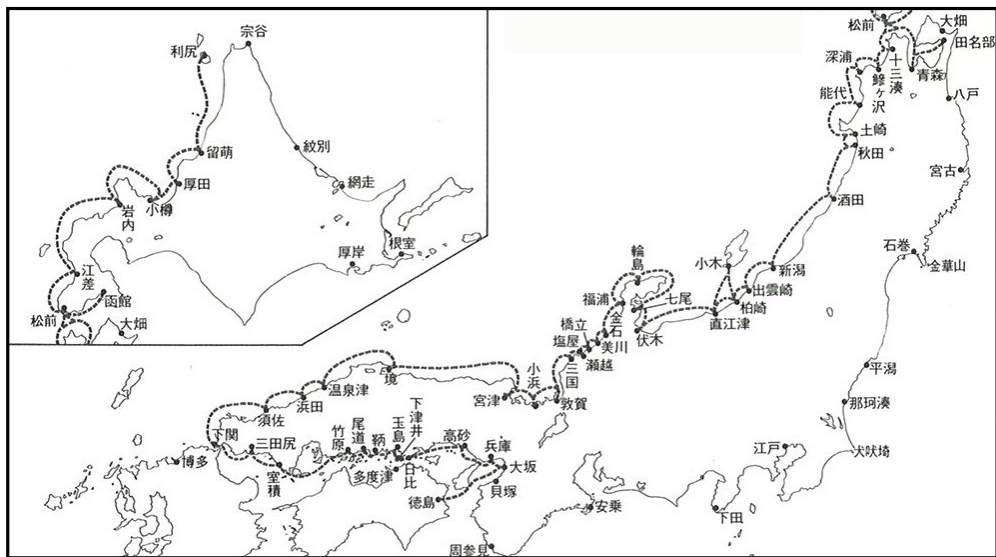
出所：「旅行者動向 2008」
(財)日本交通公社

北前船等による経済都市の発展

北陸では、陸路の中心は「北陸道」であったが、「北前船」と呼ばれる海上交通が発達した。北前船は、西回りで大阪と蝦夷（北海道）を結ぶ航路をとったが、途中の寄港地である北陸地域の各港で売買しながら行き来した。（図 20）

- ・そのため、水橋、岩瀬、伏木、七尾、輪島、福浦、金石、美川、橋立、塩屋、瀬越、三国、敦賀、小浜等の港町が発展し、現在も豪商の建てた建築物が残っている町が多い。
- ・また、大野藩は、百姓や町人に特産物を作るようすすめ、大野屋という藩営の取次店を全国各地に設けてこれを販売し、利益をあげていた。大野屋の商品運送や蝦夷地への往来のために大野丸という西洋式の帆船を買い入れるとともに、蝦夷地や北蝦夷（サハリン）の開拓や交易を試みている。

図 2-20 北前船の航路と寄港地



出所：図説石川県の歴史

街道の発達

- ・江戸時代は参勤交代の制度が確立し、街道の発達を促した。
- ・北陸道は、中山道・鳥井本 栃ノ木峠 府中 福井 金沢 高岡 富山 魚津 糸魚川 高田と続き、高田で中山道・追分に至る北国街道とつながっていた。これらの街道は、加賀藩前田氏をはじめ諸大名の参勤交代に用いられている。
- ・また、若狭街道においては近江国境と近い熊川宿が宿場町として栄えた。
- ・近世は文化人の旅が盛んになった。松尾芭蕉は「奥の細道」の終盤にて越後から越中、加賀、越前を経て美濃に至っている。

「北陸らしさ」を整理する視点

- ・加賀百万石文化の開花により、各種工芸、加賀料理が確立。輪島、山中、若狭等では漆器工芸が盛んになるなど、工芸文化が隆盛した。
- ・北前船により港町が発展し、町人の財力が強まった。
- ・参勤交代の制度より、街道、宿場町が発達し、文化人も北陸に立ち寄ることが増えた。

廃藩置県と産業の近代化（明治・大正）

- ・明治 4 年廃藩置県が実施され、新川、金沢、七尾、福井、敦賀の県が置かれた。その後の合併、分割により、現在の行政区分になったのは、富山県・石川県が明治 16 年（1883）、福井県が明治 14 年（1881）である。
- ・明治 30 年代から開通が始まった鉄道は、大正 2 年には北陸線が全通し、地域社会が大きく変化した。

産業の発達

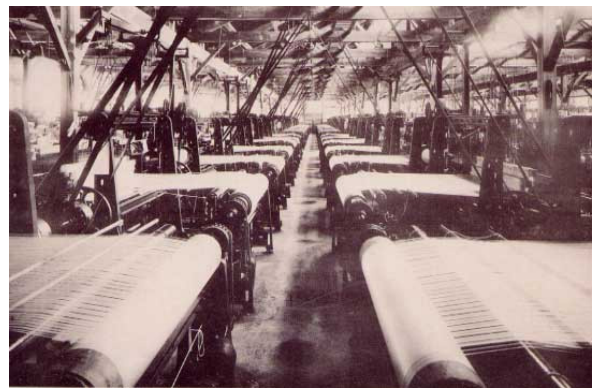
- ・富山県では豊富な水資源を活かし黒部川の電源開発が進められるようになり、それらの関係者によって利用されはじめた宇奈月温泉や、トロッキ列車が現在の観光資源となっている。（図 2-21）
- ・電源開発を背景に鉄鋼、化学、紙パルプなど重化学工業が明治末期から大正初期にかけて誘致された。また江戸時代の売薬の歴史を活かした製薬業が株式会社化し発展を遂げることになる。
- ・石川県では、江戸時代に発展した工芸である漆器、陶磁器などを輸出するとともに、加賀絹の機械化が進み、輸出羽二重を生産し、織物および織物機械産業が発展した。
- ・福井県でも同様に輸出羽二重産業が発達し、大正元年には、国内で生産額が 1 位（石川県は 4 位）になり羽二重王国を築くことになる。（図 2-22）
- ・また、眼鏡産業は明治 38 年に農閑期の副業として始まり、鯖江が一大産地として形成された。

図 2-21 大正 12 年黒部鉄道が宇奈月まで開通



出所：黒部峡谷宇奈月温泉公式サイト

図 2-22 福井市松井機業場の様子（M43）



出所：「図説福井県史」福井県文書館

米騒動

- ・北陸は米どころであり、明治期から米騒動がしばしば起こった。大正 7 年（1918）には米穀商や地主による投機的な買い占めにより米価は前年の 5 割増しに跳ね上がっていた。この年の 7 月に北海道への米の積み出しのための輸送船「伊吹丸」が魚津町（現魚津市）に寄港していたが、折から米の高騰に苦しんでいた主婦たち数十人が汽船への米の積み出しをやめるよう町役場、米穀商や大地主へ嘆願運動をした結果、伊吹丸は米の積み出しを断念し出航した。
- ・この騒動は全国に波及し、全国 368 市町村に及び、ときの寺内内閣は総辞職に追い込まれた。米騒動は主婦による民主化運動の歴史的な事件として、今も語り継がれている。

金沢明治期における文豪・哲学者の輩出

- ・前田藩の学芸奨励や、芝居小屋などの大衆文化が花開いた金沢城下の文化を背景に、明治時代三人の文豪、二人の哲学者が金沢から輩出された。
- ・三文豪は徳田秋声（M4～S18）・泉鏡花（M6～S14）・室生犀星（M22～S37）であり、金沢に生まれ、日本文学に大きな足跡を残している。
- ・西田幾多郎（M3～S20）は、金沢に近い宇ノ気村（現かほく市）に生まれ、金沢（旧第四高等学校）で学び、金沢、京都で教鞭をとり「西田哲学」を完成させている。また、鈴木大拙（M3～S41）は金沢に生まれ、旧第四高等学校で西田と親交を深め、後に仏教哲学の大家となる。
- ・金沢市には三文豪のそれぞれの記念館が、かほく市には西田幾多郎記念哲学館が立地している。（図 2-23）

図 2-23 西田幾多郎記念哲学館



出所 西田幾多郎記念哲学館HP

三国と文学のつながり

- ・高見順（M40～S40）は三国に生まれ、昭和 10 年代の文壇に新しい風を吹き込んだといわれる。
- ・三好達治（M33～S39）は大阪生まれの昭和を代表する詩人である。約 5 年間（S19～24）三国町に住んでおり、三国を愛するとともに滞在期間中に多くの作品を手がけている。
- ・同じく福井県内では、戦後を代表する作家である水上勉（T8～H16）が若狭おおい町出身であり、越前竹人形をモチーフとする作品を残している。

棟方志功や北大路魯山人を育んだ北陸

- ・棟方志功（M36～S50）は青森県出身であり、絵画の勉強のため上京、戦時中（S20～）は約 6 年間、福光に疎開した。疎開中の宗教体験などは後に世界的な版画家となる棟方志功に大きな影響を与えたといわれている。（図 2-24）
- ・篆刻（てんこく）から書画、料理まで、あらゆる分野で異彩を放った北大路魯山人を陶芸の世界に導いたのは初代須田菁華であり、大正初期に菁華の元で手ほどきを受けながら一年間ほど山代温泉で過ごし、山代温泉の旦那衆が魯山人の生活を支えた。

図 2-24 棟方志功記念館「愛染苑」
（志功が福光の地で構えた住まい）



「北陸らしさ」を整理する視点

- ・北前船や売薬などの資本を活かし、近代には、重化学工業や繊維工業を中心に、特色あるものづくりが北陸で勃興した。
- ・加賀百万石文化や、経済的に発展した町の文化を背景に、文学、哲学、美術の面で多くの文化人が生まれ育った。